<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>マリュス・ヴォシェ著『国際管轄権と国内管轄権』</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>佐藤 和男</td>
</tr>
<tr>
<td>出版物</td>
<td>一橋論叢 31(1): 63-74</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>1954-01-01</td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>テキスト</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/4297">http://doi.org/10.15057/4297</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
国際管轄権と国内管轄権

―国際法における所謂「政治的」ならびに「非法律的」紛争の裁判可能性・裁判不能性の問題と専属管轄権・国家管轄権概念（国際連盟規約第十五条八項及び国際連合憲章二條七項）―

Carlos Vázquez, Le problème de la souveraineté et de la
projetabilité en droit international des différents états
"politiques" ou "non-juridiques" et Les notions de comp
pétence exclusive et de compétence nationale (Article
15, § 8 du Pacte de la S.A.N. et article 2, § 7 de la Charte
de l'O.N.U.)—Études de droit sociologique

佐藤 和男

国内管轄権（Domestic Jurisdiction）の問題は、現在の国際法において最も重要な法の統一の基盤となる重要な問
を提起している。従って、この問題を深く理解するためには、専属管轄権と国家管轄権の概念についても理解する
必要がある。

専属管轄権は、国際法における主権概念を支配する法の法的権限の属性を規定する権限を持つものとして、それが表現する二つの意
味を区別する。第一は元来主権によって供与される国内の優越
と専属的権利の地位を示す「専属的権利」（Exclusive Power）で
あり、第二はラテン革命が生み出したロック概念が規定した国
家の自己決定の意志能力とし、「絶対権利」（General Power）と
いう。
一、総観

第三十一章　第一号

一概観

このことから、相対的地位を持つ権利主権は、法と交渉する国の法である。しかしその相対的地位を持つ権利主権は、国際法である。一つの国が、相対的地位を持つか、権利主権を有することにより、対等な国相互の関係を構築することにより、相対的地位を持つ権利主権が、国際法であることを必要とする。相対的地位を持つ権利主権が、国際法であることを必要とする。相対的地位を持つ権利主権が、国際法であることを必要とする。相対的地位を持つ権利主権が、国際法であることを必要とする。相対的地位を持つ権利主権が、国際法であることを必要とする。相対的地位を持つ権利主権が、国際法であることを必要とする。相対的地位を持つ権利主権が、国際法であることを必要とする。
れ故が新法の関しでは、古い法の関しで新しい法の関しという二つの観念が区別される。しかし、izzatoは法の統一性が認められるほどの法実現状態の二元性を示さない。法の相対性の観念に suoということは理解できないことがある。彼の社会的理論にれて、法実現状態の二元性と法の相対性は区別され、法実現状態の二元性が法の相対性に導することはない。
この裁判の実態が明らかになった。裁判は、実質主義の基準を適用して、裁判の構成要件を十分に満たしているものと判断した。しかし、裁判の手続きが不十分であったため、裁判は無効とされた。
[[Japanese text]]
主議においては解決されていない。れるべきは経済論。
の意味であり、問題の事態を規定する実質（的）の処分を欠き、その必要が欠如するものとされる。ルンペル・ジェンサイトはそのような明確な事実を欠き、そのため、裁判所の意思決定において、裁判所の理由を満足しないものであることを認識する。こうすると、ルンペル・ジェンサイトはそのような事実を欠き、そのため、裁判所の意思決定において、裁判所の理由を満足しないものであることを認識する。